第二五話

「二一世紀の知性」とは、いかなる知性か？

ある思想家の墓銘碑の言葉

さて、本書も、最後の話となった。

本書のテーマは、「知性を磨く」。

ここまでの二四話では、

「そもそも、知性とは何か？」、そして、

「どのように知性を磨けばよいか？」について、読者とともに考えてきた。

最後に、次の問いを考えてみたい。

「なぜ、知性が求められるのか？」

その問いである。

この問いを考えるとき、著者の心には、

四四年前の一つの光景が、心に浮かんでくる。

大学一年の夏、一八歳のとき、友人と二人で、ヨーロッパの旅に出た。

二人の貧乏学生の慎ましい旅ではあったが、初めての海外。

観るもの、聴くもの、すべてが新鮮な、楽しい旅であった。

空路、北欧のデンマークに降り立ち、海路、フィンランド、スウェーデンを訪問、

次いで鉄道で、ノルウェー、ドイツ、フランスを周った。

そして、最後の訪問地は、イギリスのロンドン。

そのロンドンで、必ず訪問したいと思っていた場所があった。
ロンドン郊外の森の中に静かに存在する場所。

ハイゲート墓地。

なぜ、この墓地を訪問したいと思ったのか？

ここには、人類の歴史を変えた、一人の思想家が眠っていたからだ。

この墓地を訪れ、その思想家の墓の前に佇んだとき、
目に入ってきたのは、本では何度も読んだ、有名な言葉であった。
その思想家が著作の中で残した、一つの言葉。

哲学者たちは、これまで世界を「解釈」してきたにすぎない。
大切なことは、それを「変革」することである。

The philosophers have only interpreted the world in various ways,
The point is to change it.

この墓に眠る思想家は、カール・マルクス。

時代は一九七〇年。
多くの学生が政治的な運動に身を投じた時代。
学生達は、当然の教養のごとく、マルクスの著作を読み、この言葉に触れた。
著者もまた、あの時代の多くの学生同様、
マルクスの著作を読み、この言葉に触れた。
だが、この言葉を、彼の墓銘碑に読んだとき、
心の奥深くで、一つの思いが定まった。

我々は、世界を「解釈」するにとどまってはならない。
我々は、世界を「変革」する力を身につけなければならない。

「解釈の知性」から「変革の知性」へ

もとより、現在の著者は、
マルクス主義者でもなければ、社会主義者でもない。
あれからの歳月の中で、マルクス主義という思想の限界も、深く知った。
しかし、いま振り返っても、
この思想家・マルクスの言葉は、真実を射抜いている。
そして、いま、この著書を執筆しながら振り返るとき、
彼のこの墓銘碑の言葉は、次の言葉に聞こえてくる。

「知性」は、これまで世界を「解釈」してきたにすぎない。
大切なことは、それを「変革」することである。

たしかに、そうではないか。

そもそも、なぜ、人間に「知性」というものが与えられたのか？

それは、ただ、人生や仕事において直面する問題を「解釈」するためではない。
何よりも、その問題を「解決」するためであろう。
その「解決」のために、自分自身の在り方を「変革」するためであろう。

なぜ、人類に「知性」というものが与えられたのか？

それは、ただ、人類が直面する問題を「解釈」するためではない。
何よりも、その問題を「解決」するためであろう。
その「解決」のために、人類社会の在り方を「変革」するためであろう。

そうであるならば、
「知性」というものが、ただ世界を「解釈」するためのものであってはならない。
「知性」というものは、この世界を「変革」するためのものでなければならない。

しかし、振り返れば、
二〇世紀における「知性」は、
いかに世界を「解釈」するかという「知の力」に力点が置かれ、
いかに世界を「変革」するかという「知の力」は、あまり評価されてこなかった。

されば、我々は、二一世紀、
「知性」の定義を、深化させていくべきではないのか？

もし、それを敢えて
「二〇世紀の知性」から「二一世紀の知性」への深化と呼ぶならば、
それは、「解釈の知性」から「変革の知性」への深化と呼ぶこともできる。

では、この「二一世紀の知性」への深化、
すなわち、「七つのレベルの知性」を垂直統合した「変革の知性」への深化を、
我々人類は、いかにすれば、実現していけるのか？

我々一人一人が、この「変革の知性」を体現した
「スーパージェネラリスト」へと成長していくこと。

それが、たしかな出発点であろう。

では、その先に、どのような世界が広がっているのか？

その「答えの無い問い」を心に抱き、本書を著した。

その答えを求めての旅路。

その遥かな旅路は、続く。